

周辺症状が出現している

アルツハイマー型認知症患者への看護の視点

宮崎 友紀子（基礎看護学）

【キーワード】 アルツハイマー型認知症・入院患者・周辺症状・看護過程・看護の視点

本研究の目的は、アルツハイマー型認知症で入院している患者に、周辺症状が出現しているその時々、看護師が関わることにより症状が整えられた関わりにおける看護師の思考過程を明らかにすることにより、周辺症状が出現しているアルツハイマー型認知症患者への看護の視点について示唆を得ることである。対象は、患者の周辺症状が出現しているその時々、看護師（自己）が関わることにより症状が整えられ、日常生活を送ることができた看護過程である。方法は、まず患者の周辺症状が看護師の関わりによって整えられたと思われる場面を選出し、プロセスレコードに再構成した。次に、看護師の認識に着目し判断に至る思考過程を想起し、追記したものを研究素材とした。研究素材より＜看護師の思考過程の意味＞を抽出し、場面ごとの【看護師の思考過程の特徴】を取り出した。それらの共通性と相異性を検討したところ、共通した思考過程の特徴として3項目が明らかとなった。その3項目について周辺症状が出現しているアルツハイマー型認知症患者への看護に有用であるかを考察したところ、視点として活用できる可能性が示唆された。導き出した視点3項目を以下に示す。

＜周辺症状が出現しているアルツハイマー型認知症患者への看護の視点＞

1. 患者の言動に着目し、その反応を元に表現が乱れている時は、認識のあり様の乱れと捉え、さらにはどのような感情か、現実を反映しているかと大づかみに捉える。その上でそれまでの生活を振り返り、その言動が患者にとって必要であることを理解し、そこに込められた思いや感情を受け止めつつ、患

者の困りごとや実体の消耗を捉える。

- 2-1. 患者の認識のあり様を、現実を反映していないと捉えた時には、現実の反映を促すように、看護師が直接患者の五感を刺激する。
- 2-2. 患者の認識のあり様を、現実を反映しているが困りごとや実体の消耗は解決していないと捉えた時には、まずは困りごとを解消するよう具体的な看護行為を選択し、次に実体の整えに移行する。
3. 患者と関わる中で、患者の生活過程と生活体としての反応を重ねながら対象を見ていくと、看護師の中に自分より長く生きて来られた患者の生き様に対する尊敬の念が高まり、患者が納得する解決方法を探る。